

Y28a

国立天文台水沢 VLBI 観測所収蔵「緯度観測所ガラス乾板コレクション」のデジタル化

馬場幸栄（お茶の水女子大学）

緯度観測所は1899（明治32）年、文部省によって岩手県水沢に設置された。以降、天文学・高層気象学・地震観測学・報時学における国際的拠点のひとつとして緯度観測所は精力的な活動を続け、Z項の発見で有名な木村栄（1870 - 1943年）や日本初の彗星発見者として知られる山崎正光（1886 - 1959年）らを輩出した。1988（昭和63）年、緯度観測所が東京天文台等と統合されて国立天文台に改組されると、それまで緯度観測所が所蔵していた行政文書・観測記録・観測機器類は国立天文台へと移管されることになった。かくして、かつて緯度観測所にあったそれらの歴史的な文書・記録・機器類は、現在、国立天文台水沢 VLBI 観測所に収蔵されている。さて、その緯度観測所旧蔵資料群のなかにガラス乾板のコレクションがある。ガラス乾板とは、写真撮影で用いられるネガの一種で、日本でも明治期から使用されていた。このたび、この「緯度観測所ガラス乾板コレクション」のなかから、主に人物や施設が撮影されているガラス乾板約400枚をデジタル化し、ポジの写真として閲覧できるようにした。それら写真には、47歳の若さで逝去された第二代所長・川崎俊一（1896 - 1943年）や、いやま取り壊されてしまった観測施設も写っている。本発表では、透過スキャナと画像処理ソフトを使用したガラス乾板デジタル化作業、割れてしまったガラス乾板に対する画像復元作業、被写体を特定するための各種調査、目録作成の工程について具体的に説明するとともに、デジタル化によって再現された緯度観測所の職員や観測施設の往時の様子を解説する。